

## 日出藩お茶屋襟江亭の保存修復に関する宣言

大分県地方史研究会(会長 豊田寛三)

令和3年11月2日及び12月1～3日付の大分合同新聞において、「日出町の『襟江亭』調査大詰め 現存する町最古の木造建築か」及び「文化財を継ぐ・日出藩の風待ち茶屋『襟江亭』」と題し、日出町深江に所在する襟江亭の保存の現況が紹介されました。

大分県地方史研究会でも、日出藩の参勤交代時に風待ち茶屋として使われた襟江亭の歴史的意義について注目してきました。

襟江亭は、第3代藩主木下俊長の時代の1667(寛文7)年に創建されたとされています。このことだけでも、襟江亭は大分県最古の武家建築である可能性が高いといえます。しかし深江には、初代藩主木下延俊の時代、別の場所にお茶屋が建てられたとする記録が残っており、このお茶屋を移築して襟江亭が建てられたと考えられています。そうすると1667年以前の年代を示す建築部材が出てくる可能性もあり、調査の成果が待たれるところです。

一方、船による参勤交代時の風待ち茶屋建築は、県内には他に現存する建造物がありません。県外では、時津街道の沿線に所在する長崎県西彼杵郡時津町浦郷の大村藩時津茶屋が有名ですが、門のみが町指定となっており、茶屋本体は近代の増改築によって当時の姿を伝えるものではないとされています。これに対し襟江亭は、どこまで当時の姿を残しているのか、調査成果が待たれるところです。調査結果によっては、全国に例を見ない貴重な建造物であると評価できる可能性があります。参勤交代時の風待ち茶屋に類する建造物が、全国にどれほど現存しているかという調査は、これからの重要な研究課題となっていくものと考えられます。

貴重な歴史的建造物である襟江亭の保存修復は、日出町や大分県に止まらず、全国的にも重要な取組になっていくものと思われれます。また日出町には、三川の河口に森藩が参勤交代のために使用した頭成港があり、御座船を格納した船渠(せんきょ・ドック)や船渠に水を引く仕掛けなど、現存例の少ない遺構が遺されています。襟江亭は、それらの遺構とともに保存を図ることによって、別府湾に面した日出町の歴史を豊かに物語る文化財として、日出町民や大分県民が自らの地域に誇りを持つことができる貴重な財産になるものと思われれます。

熊本藩細川氏や森藩久留島氏、府内藩松平氏は、参勤交代に際して、御座船の風待ちなどのために深江港を利用し、襟江亭を舞台とした華やかな文化交流を展開していました。襟江亭は、九州における大名間交流の舞台ともなったのです。

このように、襟江亭は貴重な歴史的建造物であり詳細な調査の成果を待って、日出町や大分県官民の総力をあげ、保存修復が進められることを、強く要望する次第です。

令和3年12月12日